



未来に羽ばたけ



皆さんは最近、好きなことに一生懸命に取り組んでいますか？
人が一生懸命に頑張っている姿は、とても輝いています。そんな
中、夢に向かって、日々挑戦し続けている子ども達があります。
今月号は、夢に向かってひたむきに頑張る子ども達を紹介します。
問合せ先 市秘書課広報係

総合的な筋力が必要になるので、
投てきの練習で行うウェイトトレ
ニングも大切なんです」と言う。
スケルトンの奥深さを語ってく
れた藤原さん。スケルトンの魅力を知
らない人に伝えるとしたら、どん
な言葉で伝えますか？と質問する
と「日常生活では体験できないス



ピードで、はたから見るとただソリ
に乗って滑っているように見えるけ
ど、実はすごく細かく操作があっ
て、一カ所間違えると動揺して次の
カーブに影響が出ます。見た目と中
身のギャップがあるので、まずは体
験してもらいたいです」と熱い思い
を語ってくれた。
最後に、今後の目標を聞いてみた。
「スケルトンとかソリの競技は有名
じゃないので、『スケルトンって言っ
たらソリを使ってるって伏せで滑る競
技だよ』って皆が言ってくれるよ
うな、なじみのある競技にできたら
なと思います」
「スケルトンをもっと広めたい」
そんな熱い情熱を持った、藤原さん
の今後の活躍に期待だ。



「バドミントンは、ほぼ週6回ペ
スで練習しています」
緊張した面持ちでそう語るのは、
光陵中学校3年生の細岡虎哲さん
だ。小学校に入学する少し前に、バ
ドミントンをやっていたお姉さんの
影響で始めたのがきっかけ。「元々
運動が苦手で、最初はやろうと思わ
なかったんですが、実際にやってみ
て楽しかったので続けてみようと思
いました」と言う。
今では、大会などで上位に名を連
ねるほどに成長した細岡さんだが、
元々は運動が苦手だったとは驚き
だ。そんな細岡さんが、のめり込む
ほどやっているバドミントンの魅力
は何なのだろうか。
「サッカーとか野球は、ボールを
自分で触ってやるのに対して、バド



バドミントン

光陵中学校3年生

ほそおか ことつ 細岡 虎哲 さん

「自分はあんまり筋
力がなくて、スマッシュは速くない
ので決まらないんですけど、ドロ
ップの緩い球とスマッシュの速い球の
間ぐらいの速さのカットっていう球
が得意です」と語る。
試合を有利に進めていくために、
いろいろな球種で相手のタイミング
をずらしたり、相手の意表を突く
もあるバドミントン。
「試合では、勝つって思いなが
らやるんですが、自分は気持ち弱
いんで途中からは勝てないとか
思ってしまうんですけど、相手を見
ながら、この球はいける、これはダ
メだなとか考えながらやっています」
常に、相手を観察しながら試合に
臨んでいる細岡さん。今、目標にし
ている選手は？と聞くと。

「スケルトンは、スピード
が出ている時で120kmを超えま
す」
そう楽しそうに語るのは、
緑陵高等学校2年生の藤原香
夏さんだ。スケルトンを始め
たのは小学校5年生の時、兄
の学校の先生に「札幌でスケ
ルトンの体験会があるから
行ってみたい？」という誘い
を受けたのがきっかけ。
「そもそもスケルトンって
何？」という方も多いだろう。
スケルトンとは、簡易な構造
の鉄製のソリで滑走し、全長
1千300から1千500位のコース
を滑り降り、ゴールタイムの
速さを競う競技。頭を進行方
向に向け、うつ伏せの状態
でソリに乗るのが特徴である。



スケルトン

緑陵高等学校2年生

ふじわら こなつ 藤原 香夏 さん

頭を進行方
向に向けて聞
くと危険なイメ
ジがあるが「ス
ケルトンはボブ
スレー、リユ
ージュの3つのソ
リの競技の中で
一番安全と言わ
れていて、スケ
ルトンは重心が
地面に近いの
で、ほとんど転
倒がないんです。
リユージュだと重
心が高く、ソリも
軽いので転倒が
結構あるんです」とスケルトンの安
全性を語る。
ソリの競技は、乗って滑るだけ
というイメージが強いが、実はそん
な単純ではない。カーブ一つ一つの
形や長さが違い特徴があるので、奥
が深い。「カーブに入るときに、こ
こを狙うっていうのがあって、上
手く入れたらこの操作、失敗したら
この操作というように、速く滑るた
めの技術的な操作が必要で、そのた
めにも普段からのトレーニングは欠
かせません」と語る。
藤原さんはオフシーズン、週2回
のトレーニングと陸上部で投てきの
選手として活動している。スケルト
ンと投てきは全く違う競技ではある
が、「スケルトンは体幹やGに耐え

「日本ユニシス実業団の渡辺勇大選手です。自分は渡辺勇大選手のプレーが好きで、ユーチューブとかでよく見ています」と語る。



目標とする選手のプレーを参考にしながら、日々練習を重ねている細岡さん。
最後に、今後の目標を聞いてみた。

「中学校で全道までは勝ってたんですけど、全国から全く歯が立たなかったんで、高校では全国で結果を出すことを目指して頑張りたいと思います」
胸に、細岡さんはこれからもひたむきに努力を重ね、その先の未来へと羽ばたいていくことだろう。



を増やさないとい今以上のスピードが出ないので、そういうところは今後の課題として残っています」と語る。最後に今後の目標を聞いてみた。「僕にとってスノーボードは楽しむものであるんですけど、その中で

この先、必ず壁にぶつかって辛い時が絶対に出てくると思うんです。でも、そんな時でも楽しめるところが僕の個性だと思っています。どんな状況も楽しんで目標であるオリンピックでの金メダルにつなげていきたいと思っています」

オリンピックへの目標を強く語ってくれた平野さんが、世界に羽ばたいて、多くの人達を楽しませてくれる日もそう遠くないだろう。



「ゴールとしては、やっぱりオリンピックです」
そう力強く語るのは、緑陵高等学校1年生の平野颯大さんだ。スノーボードをやっていた父の影響で、5歳頃から遊びで滑っていたという。そもそもスノーボードは、フリースタイル、アルペンの大きく2つに区分され、フリースタイルは滑ったり、飛んだりするもので、皆さんはこちらをイメージすることが多いだろう、一方、アルペンはスキーのような固いブーツを履き、基本的には斜面に沿って一方方向にしか滑れないもので、スラロームのように決められたコースを滑って、そのタイムを競うものが代表的である。

平野さんはスラローム、ジャイアントスラロームを中心に活躍している。そんな平野さんが、アルペンス

アルペンスノーボード

平野さんは、冬はアルペンスノーボード、夏は陸上の400メートルの選手として活躍している。アルペンスノーボードと400メートルは全く違う競技ではあるが、「400メートルでは持久力。トップスピードの中でも持久力が必要な種目で、自分の出せる力を最大限に出しながらも、最後まで走り切らなければならぬので、そこがアルペンスノーボードに似ている部分です」と語る。
アルペンスノーボードでの平野さんの武器を聞いてみた。
「僕の場合だと、体があまり強くないので、雪に合わせる技術、どんな板でもできる限り雪とけんかしないように、自分の技術で最大限のスピードを出す、そういう滑りができると思っています」
一方で「ただ、筋肉をつけて体重



写真

岩見沢高等養護学校
3年生 藤堂 さやかさん
2年生 辻 悠斗さん
2年生 花村 寿里亜さん
1年生 竹内 みお桜さん

「普段は、部員の皆で話し合っテーマを決めて、校内で撮影しています」
そう語るのは、表現写真部部長の藤堂沙也佳さんだ。
北海道の自然を舞台に、全国の高校生が東川町に集い、写真撮影の技術や表現力を競う、第24回全国高等学校写真選手権大会。全国526校の内、予選を勝ち抜いた18校が本戦に出場した。三人一組で4日間に渡り、美瑛町や上富良野町などで、テーマに沿って風景や人物などの写真を撮影した。予選を勝ち抜いた北海道岩見沢高等養護学校表現写真部からは、辻悠斗さん、花村寿里亜さん、竹内美桜さんが出場し、準優勝および選手が選ぶ特別賞を受賞した。
そもそも皆さんが表現写真部に入部しようと思ったきっかけは？と聞くと。
藤堂 学校を見学した時に写真が飾ってあって、その時にすごく興味を持ちました。生徒玄関にも賞状楯などがたくさん並んでいて、とても優秀だと聞いて、入りたいなと思いました。
辻 中学校3年生の体験入学の時に、廊下に2015年の写真甲子園の作品が飾ってあって、それを見て面白そうだな、すごいなと思って興味を持ちました。
花村 スポーツ系だと体に限りがあ



るので、写真だったら体力に
関係なく長く続けられるか
らやってみたいなと思って。
実際に目で見るのと、ファ
インダー越しに見る景色が
違うところがとても面白い
です。

竹内 この学校に入学しよ
うと決めていた時に、表現写真
部がすごいというのを知っ
て、いろいろ見て興味が湧
いてやってみたくなったと
いうことと、障がいの有る
無しに関わらず、長くでき
るといのが魅力的でした。
表現写真部に入って初めて
カメラを持った方がほとんど
で、カメラの操作はやっぱり
難しいという。



「露出と絞りとシャッタースピー
ドを上手く合わせて写真を撮るので
すが、その調整が少しでも違うと全
然違う作品になったり、その瞬間を
捕らえるのが大変だったりするの
で、難しいです」

今まで撮ってきた中で、思い出の
写真は？との質問には。
「部員をモデルに撮影したもので、
一緒にハンドベルを鳴らしていて、
その瞬間が本当に楽しくて、その様
子をセルフタイマーにセットして
撮った写真です。その写真を見るた
びに、その時の楽しかった気持ちが
よみがえってくる思い出の写真で
す」

人によって感じ方が違ったり、見
るところが違ったり、色んな見え方
がしたり、何気ない日常の一瞬では
あるが、写真には多くの思い出が詰
まっているのだろう。

最後に、今後について聞いてみた。
藤堂 卒業まで残り少なくなっ
たので、この日常を多く撮って
いきたいなと思います。2年生や
1年生には、今までの伝統をたく
さん引き継いでいってほしいし、
たくさん見てここで吸収してい
ってほしいと思います。

挑戦していけるようにしたいで
す。
花村 今ここでしか撮れない身近な

ものを撮っていきたいです。
竹内 在学中はもちろんですが、
卒業した後も趣味というかたち
で、ずっと写真を続けていき
たいです。

これからも、素晴らしい多くの思
い出を写真に残してくれることだ
ろう。



市内には、今回紹介した子ども達
以外にも、好きなことに一生懸命頑
張っている子ども達がたくさんいま
す。夢を持ち、未来に向かって挑戦
している子ども達を見るとなんだか
応援したい気持ちになりますよね。
市はこれからも、子ども達が安心
して夢に向かって取り組むことので
きる環境づくりに努めていきます。